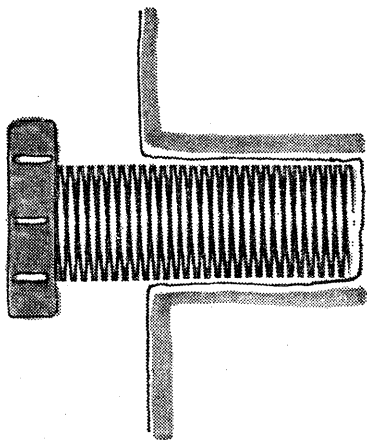


第十三回 音無しの構え

堀内 守



「音、ある？」

「は？ 何をおっしゃりたいのです？ あたしの店じゃ大抵の物は売っていますが、音は売ってはいませんね」

若い主人は、小さなお客の方をちらと見たまま忙しそうに品物を並べ変えている。小さな客は困ったように唇を噛み、店の天井を見

上げた。

「おれは音楽も好きだから、カセットだの、ディスクだの、音の出る品物は揃えているつもりだが、音そのものは売れないなあ」

主人は、気の毒そうな調子で言った。

「それとも、何かい。まだうまく言えないのかい。音、音なんかと言いたかったのかな」

「そうじゃないんです。この店では音を売っていると聞いたものだからそれで買いに来たのです。ねえ、この辺

にそんなお店ないでしょうか」

「おれはこの辺にもう二十年も住んでいるが、音を売っている店があるとは聞いたことがないなあ」

若い主人は小さな客のそばに近寄ってきて、半分は自分に向かつてそう語った。

子どもははいねいにおじぎをすると、「どうも」という一声を残して出ていった。

小さなできごとだったから、店の主人もそんなことを忘れてしまった。小さな客に馬鹿正直に対応したのがテレくさく思われたくらいだった。

数日たって、また別の子どもがやってきて、同じようなことを訊いた。

「音、ある？」

「やれ、やれ、またかい。このあいだも君と同じぐらいの年ごろの子どもが音を買いに来たよ」

「それで売ってやったの？」

「いいや」

「売ってほくれないの？」

「売る、売らないよりも、君たちのいう『売る』の意味がわからないのだよ。テープじゃなさそうだし、レコードでもなさそうだ」

主人は最後まで言わずに、こんど来た子どもを見た。服装は立派とはいえなかったが、まじめな顔つきで、何かを訴えたいように見えた。

「音を買ってどうする？」

「それは客がきめることです」

子どもはびしゃりと言った。そしてことばを続けた。言い過ぎだと反省したようだ。

「買って、しまっておくのです」

主人はまた訊ねた。

「しまう？ どうやって？」

世の中から音という音が消えてしまうのだとその子は真剣な表情で語った。小鳥のさえずりも、小川の水の音も消えてしまうのだという。

「へえ、おれが教えてもらいたいのには、なぜ音が消えてしまうのかという明快な説明だよ。まるで聞いたことも

ないぜ」

子どもは、足をばたばたさせて、じれったそうである。
「音なんかどうでもいいから、その辺にあると思うなら
みなもっていてもいいよ。録音でもするの？」

主人は、面倒くさくなったのでそう言い切った。子ども
もっぴいかかわりのなかに巻き込まれたくないと思っ
た。別の客も入ってきて、レジのあたりに並びはじめ
た。その対応に忙しくなった主人は、少年が姿を消した
のに気がつかなかった。

レジのキイを押そうとして、主人は妙なことに気がつ
いた。レジがこわれたのか全然音が出ないのである。い
つもなら、手ごたえのある音がある。ガチャンという音
が聞える。しかし、今日は、どういふわけか音も出ない。
故障なのかも思ったが、機械の本体には異常がなさそ
うである。

客はだまってカードや現金をさし出す。そのことが主
人の気にいらぬ。「やはり、ありがとうございます」

と口にしないと。主人はそれを口に出して言おうと思っ
た。しかし、喉頭がいがらっぽくて声にならなかった。
口がぱくぱくするだけである。客も同じだった。何か言
いたげだが、音が伝わってこないのである。

突然出来たできごとで人びとはあわてはじめた。映
写機のスピードを速めてフィルムをスクリーンに映した
ように、人びとはちょこちょこ歩きはじめた。

よく見ると、ふだんのスピードの二倍になったよう
である。歩いている人はいなかった。だれも小走りに走り
まわっている。自動車も相当のスピードで走りまわって
いる。けれども音が聞えないから、あたりはまったく変
わって見えた。

店の主人は、自動ドアに近づいた。とたんにドアはふ
だんの二倍のスピードで開いた。

まだ事態に慣れていない人は、ドアが二倍のスピード
で締まるのを恐れて、そこに立ち尽くした。

「自分だけが慣れていないのだ。街頭の人びとはみなス
イスイと走っている」

主人はそう心の中でつぶやいた。交通信号の切り換わるのも大変短かくなった。あんなに短かい時間内によく渡りきれるものだと思つたとき、この店を最初に訪れた子どもの姿が目に入った。交差点を渡ろうとしている。主人はその子を追ってみようと思つた。しかし、街頭に出て行く勇氣は出なかつた。

「おい」というように肩を叩かれたので主人はふり向いた。客が三人列になつて、レジのところまで待つていた。

主人は急いで戻り、「ありがとう」の代わりに、いつもよりも二倍ほどていねいにおじぎをした。客もいつもよりは柔和な表情で主人に微笑みかける。そうしないと意志が通じないかのように。

思いがけないことを発見して、主人も客たちも少しは落ちついた。

窓から外を眺める。すると、外ではスピードが二倍になつてゐる。しかし、ふしぎなことに、この店の中だけはふつうのスピードが支配しているらしい。音が消えただけである。どうしてこんな差ができたのか、主人には

わからなかつた。

ドアがあくけはいいがした。ふり向くと、そこにいつかの少年が二人立っていた。この子たちに訊けば、事態の原因がわかるかもしれない。主人はそう思つて、にこにこして迎えた。子どもたちも近寄つてきた。紙をめくつて彼らは太い字で書いた。

「音をくださつてありがとう」

主人は書いた。

「どうしてこうなつたのか教えてくれ。声が出ない。外ではスピードが早くなつてゐるようだし」

二人の子どもたちは顔を見合わせた。にっこりと笑つたものの、主人の質問に答えるけはいは見せなかつた。そのまま外へ出ていき、二人の子どもは主人の視野から消えた。

新聞だけは毎日配達されてくる。おかしなことに、今回のできごとについては何も報じてはいないのである。しかし広告欄はまったく違つてしまつていた。

「声高騰につき、不要のものあれば買いたし」「あなたの声を保存します。冷凍にして十年後に利子つきで払い戻します。高利まわり、四分。複利計算」「交換したし、子どもの声と高齢者の声」

何やらさまざまい風景であった。

その日も一日、昨日と同じであった。夜、店を締めてから主人はお金の計算をした。銀貨も銅貨も音を立てない。シーンとした店の中にもう何日もいる。静かであるということはできなかった。何やら身体がふわふわしているような、逆にずっしりと重くなったような感じなのである。

音や声は出ないのか。出ても何かに吸収されてしまうのか。その辺がよくわからなくなった。外の風景は、夜にははつきりしないように思えた。外に出て、街の中を歩きまわってみたら、変化のあとが多少は理解できるかもしれない。主人はそう思ったりもした。

二人の子どもたちはごきげんだった。ここにはあらゆる

音が全部揃っている。聞きたいと思う音を聞くことができる。ボタンを押すキーボードが壁の四方に設けられている。

「小川のせせらぎの音が聞きたいな」

「じゃ、やってみるか」

二人は、いくつかのキイを叩いたり、ボタンを押したりした。

小川の音がきこえはじめた。だんだんと音が近づいてくる。

「ああ、いいな」

「うん、いいな」

「清らかな水の音。清流。淡水魚の棲む小川」

「さらさら、ちよろちよろ、さらさら、しゆるしゆる、びゆる、びゆるる、びゆる。ああ、描写がいいな」

「でも、これだけでは繰り返しにすぎないだろう。もっと、別の編集ができないかな」

「そうやったら自然の味は変わってしまうのじゃないの」

「いや、編集し直すと、かえって自然がうまく表現されるのさ」

「ずうっと昔の音を聞いてみたいな」

「何を？」

「百年前のこの町のあたりにはどんな音があったのか。

馬のいななき、鶏の声、物売りの声」

言うより早く壁面のスピーカーからどこか音が抜けた音が響いた。

「何だ、これは。牛の鳴き声のようだ。しかも遠くからきこえてくる」

「人口が少なかったのだ。家もまばらだったからだろう」

物のわかったような言い方をしたのは背丈の少し高い子だった。

「ぼくたち、子どもらしくないことを使っているね」
他方がそう応じた。

「この間からだよ。急に声まで変わってしまった」

「じゃ、この間よりも前のぼくの声もここに収録してあ

るはずだね」

二人は夢中になって索引を引いた。電話帳のような部厚い本には、こんなときの操作まで記されていた。

「あ、あったぞ、あったぞ。こうすればいいのか」

二人は手を叩いて喜んだ。このあたりはまだ子どものままである。しかし、その次の段階になると、二人はまるでおとなだった。術語をふんだんに使いこなし、声をかけ合って、機械を操作していく。

突然、声が聞えてきた。

「いやだよ、いやだよ、行きたくないよ。やーめたっ
と」

それは、二人の表情に変化を及ぼした。

「あ、これはぼくの声のようだ。何をわめいているのか、聞き分けのない言い方をしている」

「たしかに君の声だ。それとくらべると、いまの君の声は
ずいぶん太い声になっているね。まるで別人のよう
だ」

「君がおとなになってみようなんて言い出したのだけ。

それで音の買い占めに取っかかったのだったけ」

店の品物も底をつきはじめた。何しろ品物の補給ができなかったのだ。主人は、あの日以来、商品の仕入れに出かけていない。客も寄らなくなった。残り少ない品物を一カ所に集めながら、主人はひとりごとを言っていた。

「なにがなにやらさっぱりわからん」

そう言ったとき、屋根裏あたりでズシンと重い音がした。何か屋根に落ちたらしい。主人は気をつけながら階段をのぼった。屋根が破れ、そこからヘリコプターの残骸が見えた。あまりスピードを出し過ぎて浮力の調整に失敗したらしいのである。

操縦席には主人と同年齢とおぼしき操縦士が気を失っていた。「おい」とゆり動かしたが返事がない。何回か身体をゆり動かしているうち、目を開いた。そして「いやだよ、いやだよ、行きたくないよ。やーめたっ」と

とつぶやいた。その声はまるで幼ない子どものような声だった。

肩を貸してやり、階下に降ろしてやると、やっと元気が出てきたのか、外をきよるきよると見まわし、げげんな声をした。

「あれか、もうだいぶ前から、外の人びとは二倍のスピードで走りまわっている。大方君のヘリコプターも二倍のスピードでとびまわっていたのじゃないかね」

「二倍？ そんなことはないです。ちゃんと、規定どおりのスピードを維持していたのだから。スピードを二倍にしたらコントロール不能になりますからね」

「あなたの判断力が二倍に増幅したとしたらどうだね。つまり、何もかもきっちり二倍になったとするのだ」

「だめですよ。全部が全部二倍になるなんて不可能なことです。たとえば、人間の身体をいまの形のまま二倍にしたら、もっと行動は鈍くなり、反対に大脳の働きは何倍かになるでしょうね。そのバランスを保つには身体各部分を再調整しなきゃならない。機械的に二倍にする

というのは不可能なのです」

「へー、ずい分くわしいね。あなたはエンジニアだったのですか」

「いや、全然別です。わたしは、一介のスポーツマンに過ぎないのです。操縦中、突然、空の一角が破れましてね。その破れ目の形が面白いものだから機をそこに近づけたのですよ。すると、どうでしょう。機はそこに近づくにつれ、急に操縦不能の状態になってしまい、ぐんぐんとその破れ目にひき込まれていきます。気がついたら、あなたの顔が見えたというわけです」

「空の破れ目、ですって？ これはまた異なことを承りますねえ。夢でも見ていたんじゃないですか」

「いや、夢を見ていたのではありません。それが証拠に現にこうやって、あなたと向い合っているじゃありませんか」

「そう言われればそうです。しかし、どうも変なのだなあ。空の破れ目なんて」

「ホントなんです。空が突然、破れたのです。その破れ

るのがスローモーションのようにひどくゆっくりしてしまってますね。

こちらの世界からあちらの世界へ渡れる入口のように思えました。開口部なのです」

二人の子どもは、機械が作動しなくなったのに気がついていた。

「あれ、おかしいな」

あちこちいじってみた。蹴とぼしてみたりもした。しかし、スクリーンには何も映らなかったし、何の音もきこえてこなかった。

大きな部屋と見えていたものが、急に小さくなり、ダンボール箱に変わってしまった。その箱に入って二人は遊んでいるのが発見された。

「危なかったなあ。ダンボール箱に入って遊んでいて、箱ごとクルマにつぶされた子どもがいるぞ」

おとなたちはそう言って、二人の子どもをたしなめた。

二人の子どもはそんな忠告のことはすぐに忘れてしまった。あのダンボール箱には見覚えがないのだ。音を集め、袋や空きカンに入れて、何度も地下室に運んだのだ。そのうちに、地下室のまわりの壁にスクリーンができ、片すみに置かれていた机の上に操作盤ができてきたような気がしたからである。だれが何といおうとも、あれをもういちど経験してみたい。二人はもういちど、あの店に出かけてみようと思つた。

ところが、どこをさがしても、あの店はなかった。

「こつちだったような気がする」

「こんな入口だったような気がする」

二人は何日もかかってあの店をさがし出そうとした。しかし無駄であった。決心も鈍ってきた。ちようどそんなとき新しい遊びがハヤリだした。それに加わっているうちに、二人はそれに夢中になり、他のことをすっかり忘れてしまったのである。

何年かたった。

背丈の高い方の子どもは、海岸近くに店をもつた。季

節によらず、よく客が入った。客は黙って入ってきて、黙って品物を買っていく。これが新しいマナーなのだろうか。店の主人はそんなことを考えていた。

暇なときには窓から外を眺めた。海岸ぞいの松並木をすいすいとツバメが通り抜けて行く。まったく軽やかである。それを見ると、主人は心のどこかで、あのツバメの飛ぶスピードを二倍にしてみたいという欲求が盛りあがってくるような気がした。

街頭をゆっくりと散歩している人びとは時間をもて余しているように見えた。もつとてきはきと機敏に歩けばいいのにと主人は思った。彼は散歩というものがどんなものか知らなかったのである。

ある日のことである。妙な客が入ってきた。小さな子どもだった。顔に似合わぬ声で、

「音、ある？」

と訊いた。それはまるで「オートアール」というようにきこえた。

まさか「オートアール」じゃあるまい。そう思つて主人

はその子の顔をじっと見つめた。すると、自分の口を
いてだれか別の人の声がとび出した。

「はて？ 何をおっしゃりたいのです？ あたしの店じ
や大ていの物は売っていますが、音は売ってはいませ
ね」

主人は驚いて自分の口を手でおさえた。目を白黒させ
て天井を見あげたとき、屋根裏でズシンという鈍い音が
した。

あわてて階段をかけあがってみると、何と屋根裏にへ
リコプターらしき物体が見えた。操縦席には小さな子ど
もがぐったりとなって気を失っていた。

主人は、何回か子どもの肩をゆり動かしてみた。声も
かけてみた。

すると、その子はゆっくりと目を開いた。
そして太い声でつぶやいた。

「いやだよ、いやだよ、行きたくないよ。やーめたっ

と」

主人はあっと驚いて気を失なった。その声がまるで自
分の声そっくりだったからである。

何ヵ月かのち、主人はふたたび店を開けた。ちょっと
した気分の動きで窓の外の風景は違って見えた。店内の
掃除をすませ、レジ近くの椅子に腰をおろして一息いれ
ようとしたとき子どもが入ってきた。静かに近づいてく
ると、ややためらいがちに、

「音、ある？」

と訊いた。

主人は、こんな場面を過去何回も経験したような気が
した。そこでこう答えた。

「ええ、いろいろ取り揃えてあります。おききになりま
すか？」

子どもは大きくうなずいた。

(名古屋大学)